
「お泊り会」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「お泊り会」

【Nコード】

N6448Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

俺の娘、花火^{はなび}は、俺が高校三年だった時に出来た子。

「女子”って言い方ってさ、一体何才まで使えると思う？」

風呂あがり、水の滴る長い髪をタオルで拭きながら牧子まきこが言った。

「私の中のイメージではやっぱり女子って言ったら、高校生までじゃない？」

ドライヤー要らずというクリンクリンの短い髪を指でくるくるしながら花火はなびが答えると、

「だよーね！ 私と同じ。せいぜい二十代までじゃない？」

と、おかっぱ頭の千尋ちひろが乗っかる。

そんな女子三人の会話を横目に、俺は火にかけた鍋の中のラーメンの麺を箸でほぐす。

「おい、おまえら、醤油ラーメンでいいよな」

鍋の中でほぐれてゆく麺を見ながら、俺はリビングの三人に向かって言った。

「えー、あたし味噌味がいい」

花火は真っ先に振り返ると不満そうな顔で俺を見た。

「味噌ないよ。醤油で我慢しろ」

彼女らの返事を待つ前にすでに醤油を用意していた俺は、花火の意見を却下する。

「あ、私達は醤油でかまいませんからー」

牧子と千尋が笑って言った。

この女子三人は全員、中学一年生だ。

で、花火だけが俺の娘。小生意気な娘。口の達者な娘。あとの二人は花火の友達。今日が金曜日で明日は学校が休みということもあり、いわゆる女子のお泊り会ってやつをしているらしい。

そして、誰からも仰天されるのは、この子ができたとき、俺はまだ十八歳の高校三年だったということだ。だから俺は現在まだ三十一歳。

会社の同僚の男から、

「青井さんあおいってお子さんいるんですよね？ 幼稚園くらいとかですか？」

と笑顔で聞かれ、

「いや、中学一年です」

と答えた時のそいつのポカン顔が忘れられない。そして彼は天井を見上げながら必死に何やら計算をしていた。一体何歳の時の子供なのかと計算しているのだろうと思った俺は、彼が計算し終える前に、

「俺が十八歳の時にできた子ですよ」

と丁寧ていねいに答えてやると、すごい声を上げる。

「ねえ、樹たつき。お母さんはいつまで旅行行ってるんだっけ？」

娘は俺を下の名前で呼ぶ。家の中でならいいが、外でそんな呼び方をされると、はたから見れば俺たちは年の離れた恋人にしか見えず、俺がロリコンみたいな目で見られる。

「日曜の夜には帰ってくるってよ」

母親は俺より二つ年上。つまり、花火を産んだ時は二十歳だった。出会いはいくある平凡（？）な感じで、大学受験のために通った塾の学生講師が今の嫁だったというわけだ。

それで彼女が妊娠してしまい、結婚する決意をした俺が彼女と一緒にうちの親に報告をした。

学校帰り、制服姿のままの俺は神妙な面持ちで真剣な雰囲気を作るべくかもしだしながら、状況説明をした。

普通の一般家庭なら、俺は親父にぶつとばされてただろう。しかし親父は、

「でもおまえ大学はどうするんだ？ もういつそ就職するか？ お嬢さんと子供を一生養っていく覚悟はあるんだろ？」

と、実にのほほんとした口調で言った。

俺の方が啞然としたくらい悠長な態度だった。

しかも母親までもが、

「あら、嘘！ この年でもう孫抱けるの？」

と拍手していた。なんて親だ。いや、俺が言うことじゃないけど。

「ほら、ラーメンできたぞ」

俺が三人のところへ醤油ラーメンを運んでいくと、玄関で物音がした。

するとガチャリと鍵が開く音がし、「最悪だわ」と言う嫁の声でした。

玄関に向かうと、スニーカーを引きずった嫁が不機嫌極まりない顔で靴を脱いでいた。

「どうしたの？」

俺が聞くと、「最悪なんだってば最悪！」と“最悪”を繰り返した。

廊下にスニーカーを放置したまま嫁はリビングに入り、

「花火ー」

とラーメンをむさぼる花火に後ろから抱きついた。

「ちょっと。こぼれるよ」

迷惑そうな娘。けど、仲のいい女友達みたいで、俺はちょっと二人が羨ましくなる。

「おまえも食うの？」

俺はまた台所へ立ちながら嫁に聞く。

「食う食う。もう食いまくる」

やけくそな様子で嫁は言った。

「醤油ラーメンでいいよね」

「えー味噌がいい」

なに娘と同じセリフ吐いてんだよ、と思った俺は一人で笑う。

「旅行はどうしたの？」

花火が嫁に聞いた。牧子と千尋の二人も興味津々に聞いている。

「それがさ聞いてよ。みんなの分の飛行機の手ケット持ってた子が

さ、空港に着いたとたんに、“ 忘れた！！ ” って叫んだのよ」

「うわー最悪じゃん！」

花火が目を丸くしている。

「もうその場で新しく買えば良かったじゃん」

嫁の分のラーメンを茹でながら、俺が女子達の会話に参加すると、
「そんなお金ないよ！ まさか飛行機乗れないなんて思ってたし！」

と嫁がこつちを振り返って反論した。

それから嫁の分のラーメンが出来上がり運んでやると、女たち四人はますます会話に花咲かせ、その楽しそうな笑い声は延々続いた。
たまに俺がなにげなく会話に口を挟むと、

「ちよつと樹。男は入ってこないで。女だけの話なんだから」

と、まだ女にもなっていない花火が生意気にも言うので、俺は一人、二階の寝室に引っ込み、布団の中で女達の笑い声を聞いていた。

「なんか、いい女って」

独り言。

うとうとしはじめた頃、寝室の扉が開く音がかすかにした。

うつすら目を開けると、花火が楽しそうな顔でこつちを覗いている。

「なに？」

「樹、一人で寂しいんでしょ？」

からかうような口調で花火が言う。

「寂しくないし」

「嘘つき。寂しいんでしょ？ 仲間にいれてあげてもいいよ？」

「遠慮する」

「あつそ！」

ちよつと怒ったようにそう言うのと、花火は扉を閉めた。

と思ったら、その直後また扉がそつと開く。

「なにやってんの？」

体を少し起こして俺が言うつと、

「……ラーメン、美味しかったよ」

と小声で言つて、花火は階段を降りて行つた。

俺は一人笑いながらまた横になる。

まだ高校三年だったあの頃、嫁と結婚してあの子を育てて良かったな、花火と出会えて良かったな、とあらためて思った。

嫁は、まだ高校生だった俺のことを考え、一度は「おろそうかな」なんて不安げに言つてた時もあったけど、俺の方は逆になぜか不安がなく、自分自身がまだ子供のくせに、自分の子供が欲しいと思つたほどだった。

まあ、この楽天的な性格は、あの親にしてこの子あり、なのだろうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6448y/>

「お泊り会」

2011年11月19日20時29分発行